



第3回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北野, 健一, 金田, 忠裕, 井上, 千鶴子, 於保, 幸正, 絹川, 直良, 下野, 辰久, 長澤, 智明, 浜, 正樹, 河野, 学 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007583

第3回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ 開催報告

北野健一^{*1}, 金田忠裕^{*2}, 井上千鶴子^{*1}, 於保幸正^{**1}, 絹川直良^{**2},
下野辰久^{**3}, 長澤智明^{**4}, 浜 正樹^{**5}, 河野 学^{*3}

A Report on the Third Workshop of Teaching Portfolio

Ken'ichi KITANO^{*1}, Tadahiro KANEDA^{*2}, Chizuko INOUE^{*1},
Yukimasa OHO^{**1}, Naoyoshi KINUKAWA^{**2}, Tatsuhisa SHIMONO^{**3},
Tomoaki NAGASAWA^{**4}, Masaki HAMA^{**5}, Manabu KONO^{*3}

ABSTRACT

大阪府立大学工業高等専門学校は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。その後、2010年1月には第2回目、8月には第3回目、2011年1月には第4回目となるティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催し、現在常勤教員78名中27名(35%)がティーチング・ポートフォリオを作成しており、作成率は日本一である。本稿では、第3回ワークショップの概要について説明した後、ワークショップ参加者の感想をメンティー・メンター双方の立場から述べる。また、ワークショップ後にメンティーに対して実施したアンケートの結果もあわせて報告する。

Key Words: teaching portfolio, faculty development, mentee, mentor

1. はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校（以下、本校と略す）は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ（以下、TPと略す）作成ワークショップ（以下、WSと略す）を開催した^[1]。2010年1月には2回目^[2]、2010年8月には3回目、2011年1月5～7日には4回目となるTP作成WSを開催し、2011年5月現在常勤教員78名中27名(35%)がTPを作成しており、作成率は日本一である。本稿では、第3回TP作成WSの概要について記し、WS参加者の感想をメンティー・メン

ター双方の立場から述べる。また、WS後にメンティーに対して実施したアンケートの結果もあわせて報告する。なおTPについての詳細、特徴等については既報^[1,2]を参照されたい。

2. ワークショップの概要

第3回TP作成WSは第1,2回目と同様^[1,2]、学校内で2日半の日程で開催した。当日のスケジュールを表1に示す。ほとんど第1,2回と同じであるが、3日目の午後にあった「よりよいメンターになるために」は、作成者から「時間が足りない」との意見を踏まえ、「TP作成作業」の時間に振りかえた。また従来3日で3回であった個人

表1 第3回TP作成WSのおもなスケジュール

	8月11日	8月12日	8月13日
午前		個人メンタリング(2) TP作成作業	個人メンタリング(4) TP作成作業
午後	オリエンテーション 個人メンタリング(1) TP作成作業	個人メンタリング(3) TP作成作業	TP作成作業 プレゼン準備 TPプレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会 TP作成作業	夕食会 TP作成作業	

2011年8月22日受理

*1 総合工学システム学科 一般科目
(Dept. of Industrial Systems Engineering: Liberal Arts)

*2 メカトロニクスコース
(Mechatronics Course)

*3 元本校環境都市システムコース
(Environmental Systems Engineering Course)

**1 広島大学
(Hiroshima University)

**2 文京学院大学
(Bunkyo Gakuin University)

**3 大阪国際大学
(Osaka International University)

**4 苫小牧工業高等専門学校
(Tomakomai National College of Technology)

**5 文京学院短期大学
(Bunkyo Gakuin College)

メンタリングの回数を1回増やして4回とした。

今回のWSではメンターの育成も大きな目的であり, 第1回でTPを作成した6名のうち4名が, 第2回でTPを作成した9名のうち4名がメンターとなった。それ以外に, 学外からメンター兼スーパーバイザーとして1名, メンター1名の計10名がメンターとなった。初メンターは6名であった。メンター兼スーパーバイザーは, 愛媛大学の秦伸治氏にお願いした(秦氏は, 2008年8月に大学評価・学位授与機構で行われたTP作成WSにおいて, 北野とともにTPを執筆した人物である)。一方, メンティー(TP作成者)は本校から5名と学外から5名(阿南高専1名, 広島大学1名, 大阪国際大学1名, 文京学院大学1名, 文京学院短期大学1名)の計10名であった。メンター1名が担当するメンティー数は1名となり, 負担はかなり軽減された。メンティーの構成を表2に示す。今回の特徴としては, 先述した学外から5名の参加があったことに加え, 本校で31年の長きにわたり教鞭をとられ, 2010年3月末に退職された教員が参加されたことにある。この方は「文化の継承」としてのTP, いわゆる「レガシー・ポートフォリオ」に挑戦された。もう一つの特徴としては, 今回は本校から参加したメンティー全員が教授であり, 前回の准教授以下(+管理職)の布陣から一変した。TPの提出は2晩とも午前0時までに担当メンターとスーパーバイザー宛に電子メールで提出とした。なお, 夜の食事は任意参加としたが, ほとんど全員が参加された。

表2 第3回TP作成WSにおけるメンティーの構成

所属	職階	在職年数	専 門
本校 5, 学 外5	名 誉 教 授 1, 教 授 7, 准 教授 1, 講師 1	30 年以上 2, 20~30 年 1, 10~20 年 1, 10 年未満 6	物理 1, 土質力学 1, 計測 工学 1, 電子工学 1, 数学 1, 素粒子論 1, 金融・国 際金融 1, 情報処理システ ム 1, 環境教育・化学 1, 地質学 1

3. ティーチング・ポートフォリオを執筆して

於保幸正 平成22年8月11日から13日にかけて大阪府立高専(現大阪府立大学工業高等専門学校)でTPを執筆した。執筆した経緯は以下のようなものである。広島大学でもTP作成を組織的に導入できないかとかねて考えていたが, 昨年6月に愛媛大学で大学教育学会が開催された際に, アメリカから一時帰国されていた大学評価・学位授与機構の栗田先生とお会いし, そのことを伝えたら, 一度私もTPを書いておいたらいいのでは, と言われた。なるほどと思って, 早速どこかでワークショップを開催する予定があるか, インターネットでチェックしたら, 運よく大阪府立高専で開かれることを知り, 申し込んだ次

第である。TPには以前から興味を持っており, ピーター・セルディン先生の本を読んでいたが, その本の訳本を栗田先生が出版され, ますます興味を抱くようになった。このことは, 私が広島大学に就職し, 長い期間教養教育に係わりをもったことによる。私は理学部出身であり教養教育について深く考えることはなかったが, 広島大学総合科学部に就職して, 教養教育として何をどのように教えていいのか大変困った覚えがある。その後, 総合科学部の将来を考えるワーキングの座長になり, ますます教養教育について, 考えざるを得ない立場となった。さらに大学設置基準の大綱化以降の平成9年には, 教養教育に関して大きな改革に従事してきた。その際, 考えていたのは, 教養教育の大枠をつくっても, 個々の教員がきちんと全学的な理念を理解しないと, 大学教育は成り立たないということである。学生の学びの多様化が進み, 気質も大きく変わってきている。これに対応する教育を行うためには, 常に忙しくしている教員が一度自分自身が関わっている教育についてゆっくり見つめ直し, それを踏まえて授業方法や内容を考える時間が必要だと考えるようになった。

ワークショップの3日間はあっという間に終わった。構成を練り, メンターとの面談を終え, さらに原稿を修正して, 夜中までにTPの原稿をメンターに送ると, やつと一日が過ぎてしまう。もちろん, 夕食を共にして様々な意見を聞くことができた場は大変有意義であった。このような充実した時間を過ごすことはここ何年となかったように思える。また, 忙しい中であっても, 自分は大学に勤めて何をしたかったか, じっくり考える機会ともなった。このような時間を持つこと以外に大阪府立高専で最も驚かされたのは, ワークショップを実施するための組織がきちんと機能していることである。メンターの方はもちろん全体をサポートされている方々がそれぞれの役割を理解されているように見受けられた。TP作成には組織的な取組みが重要であることを認識させられた。今後広島大学で見習わなければならない点である。

TPを執筆してまもなく一年が経過しようとしている。広島大学でもワークショップが開催できるように準備を行っているが, 自分のTPを見直す時間もなく, 時間だけがどんどん過ぎてしまっていることに気がついた。今回改めて自分が書いたTPを読んでみた。これまで断片的に考えていたものが, 1つのまとまりとして文章化されていると感じた。もっと若い時にこのようなTPをまとめる時間があったら, その後の学生の教育に有益だったろうなと思う。特に中堅的な立場にいる教員には是非時間をとって頂き, これまでの教育の振り返りを行ってもらいたいものである。

絹川直良 2010年8月に大阪府立工業高等専門学校(当時)で行われたTP作成ワークショップに、同校北野健一准教授のご厚意で参加し、マンツーマンでメンターの指導を受けることができたことを深く感謝している。実際にTP作成について集合研修で指導を受け、以下の点を強く感じた。

①TP作成は、個々の教員単位で実施可能なFD活動であると強く感じる。このワークショップでは、実際に、教育理念、教育責任、教育方法、授業評価、学習成果、教育改善、および今後の目標に分け、さらに、添付資料としてそれぞれ可能な限りエビデンスをつけて、ポートフォリオを作成した。作業を通じて、自らの教育やサービス内容を振り返り、特に自らの教育理念につき省察をおこない、メンターから様々な指導を受けた。これにより、教育活動そのものを振り返り、改善すべき点を認識することができた。

②専門分野の異なるメンターからの確かな指導を受けることで、教育に対するモチベーションを高めることができた。専門分野が近い教員同士よりも、専門分野を全く異にする教員同士でTPの作成・指導を行う方が良いとのアドバイスを事前にいただいていたが、それを実感した。教育方法は、分野や科目によって異なる部分と共通する部分があると考えられるが、教育に力を入れている大阪府立工業高等専門学校で研修を受けることで、色々な気づきを期間中得るだけでなく、教育に対する様々な励ましをいただいた。

③教育により力点を置き学士課程教育の強化につなげようとしても、個々の教員単位ですぐになし得ることには限界がある。とりわけ、FDといっても、ミクロ・レベル(教授法)だけでなく、ミドル・レベル(カリキュラム)、マクロ・レベル(組織)まで包括した、すべてのレベルの教職員を対象にしたアカデミック・ディベロップメントの必要性が説かれており、管理職も含めたFD概念の再定義が必要と言われている。個々の教員は、ミクロ・レベルのFDに加えて、ミドルやマクロレベルのFDにも同時並行的に取り組むことが求められている。このような状況下で、TP作成は、教員自らも達成感、満足感をもちモチベーションの向上につながる重要な作業であると考ええる。

④特に私立大学の教員の場合は、研究、教育の他に、学内での諸サービス活動の比重が高いが、これらサービス活動についても自らの理念を述べ、授業科目担当を伴う場合には、通常の担当科目と同様にTPに含めることが有効と考えられる。その意味で、私立大学教員の多くにとっては、TPではなくAP(アカデミック・ポートフォリオ)作成をテーマとして考える必要があると考える。

下野辰久 TPに関しては、セルディンの著書も読んで

いたこともあり、ある程度の知識は持っていた。そこには、メンタリングのことも当然書かれていたが、この内容なら、ひとりでも書けるのではないかと軽く考えていた。しかし、大学教育学会のラウンドテーブルで北野先生とお話したことが縁で、府立高専のワークショップに参加させていただけることになり、3日間のWSを終えて、その考えは大きく変わった。今回のWSは、私にとって非常に有意義なものであった。

府立高専のWSにはいくつもの優れている点がある。北野先生を中心として実施されている、このWSの3つの優れた点を順に述べる。

① 3日間のWSの場がもたらす効果

1日目の午後から始まり、2回の夕食会を含めて3日目の午後に至るプログラムは充実していた。メンターとメンティーだけのコミュニケーションではなく、参加しているすべてのメンバーとの間のコミュニケーションがそこには存在していた。

執筆作業の場は、自らの教育への思いを文字に変えるワークを行う、濃厚な時間が流れる静寂な空間であり、そこにいる他のメンティーは同志のように感じられた。一方で、昼食の時間や夕食会の場は、教育について語り合える活気に溢れた場であったと言える。メンターを含めて、多くの教員と教育の実践に触れることができた。TPを執筆することがFDであることは間違いないが、3日間のWS自体が貴重なFDの場であった。

② TPの自由度の高さ

TPの執筆に際しては、「教育理念」、「教育の責任」、「教育の方法」、「教育の成果」、「教育の改善」という項目は設定されているが、こうでなければならないというものはない。私は思うままに書かせていただいた。

「教育理念」については、所属大学にはそれなりのものであるが、それを一応尊重した上で、私は自分自身が「こうでなければ」と考えている理念に基づいて行動している。また、「教育の責任」の部分は一人ひとり異なるはずであり、私の場合は3つの責任を負っている。(1)一人の教員(授業担当者)としての責任、(2)教育プログラムを提供する機関の役職者としての責任、(3)課外活動の顧問としての責任である。それぞれの責任に対して、理念に基づいて実行していることとその成果(エビデンス)、そしてそれらに対する改善の取り組みという形でTPを構成した。最後に披露された他のメンティーのTPも、それぞれが個性的なものであった。

③ メンタリング

TPにおけるメンターの存在の重要性が理解できた。メンターは自分が「書きたかったこと」を、書けるように支援してくれる存在と言える。自分だけでは気づかなかった点や整理できていない点を、メンタリングの中で、十

分に考えさせていただいた。これが、よりわかりやすく、自分も納得できる TP の作成につながったとも言える。

WS の最後に感じた充実感と達成感は、今後の教育活動へのエネルギーを確かに充填してくれた。ただ、自分が対面している学生たちに、このような感覚を持たせるためにはどうすればよいかという課題も、一方で設定されたような気がしている。

長澤智明 最初に、私が当時所属していた阿南高専においても TP 作成ワークショップは開催されていた。しかし、メールが気になったり、学生が訪ねてきたり、または急な仕事を頼まれたりと、TP 作成に集中出来ないのではと思い、今回大阪府立高専における TP ワークショップに参加させていただいた。外界と完全に遮断して臨んだ TP ワークショップでは、作業に集中することが出来、非常に充実した 3 日間となった。しかし、各教員がどのような理念で教育に携わっているかを知り、それらを共有することも TP ワークショップの大きな利点であると思う。そういう意味では、同じ職場ではたらく先生の教育についての考え方などを、生の声で聞きたかったという思いもある。

さて、高専に教員として赴任して 5 年目となったときに、私は TP の存在を知った。それまで毎授業は、自分なりに努力してきたつもりだが、教育理念については深く考えたことはなかった。今回、TP を作成しようと思った 1 つの理由は、自分の教育理念について一度深く考え、文章にしたいと思ったからである。理念を明確にすることで、今後の教育改善に活かせると思った。もう 1 つの理由は、研究業績に関しては論文数などで、比較的评价されやすいが、教育業績についてはその評価が難しい。教育業績について評価される 1 つの資料として TP が役立つことを期待して参加した。

ワークショップに参加するまで、TP の内容や構成、教育理念については、意図的に考えていなかった。事前にいろいろ考えずに、ワークショップだけで書き上げた方がいいと思ってのことである。これは正解であり、事前にいろいろ考えていったとしても、結局全部書き換えになっていたと思う。また、私は文章を書くのは遅い方なので、3 日で書き上げることが出来るかは、非常に不安であったが、実際始めてみると、メンターの先生が本当にうまく誘導してくれて、初日から筆が進んだ。特に教育理念が固まってからは、おもしろいように筆が進み、ワークショップ期間内に完成することができた。

私が満足いく TP を作成することが出来たのは、メンターの先生のおかげである。会話の中から、私の考えの核心を抜き出してもらい、それまで自分の中でばらばらであったパーツを 1 つの物語にさせていただいた。メンター

の役割の重要さとその難しさを認識した。一人で TP を書くというスタイルもあるようだが、私はワークショップで書くことを強くお勧めしたい。作成した TP を久々に読んだが、よく書けていると思った。この TP は私の誇りでもある。今後もきちんと更新し続けていきたい。

浜正樹 2010 年 8 月に大阪府立工業高等専門学校（当時）で行われた TP 作成ワークショップに、本学経営学部 of 絹川から誘いを受け、ワークショップへの参加ができたことを大変良い経験になったと考えています。

TP そのものについて全く理解していなかった私は、大阪行きの電車の中で初めて関連書籍に目を通したような有様でしたが、一読して TP が非常に有益であることが理解できました。特に、昨今の私立大学では教員に要求される教科・業務が非常に多岐に渡ることが多くなっており、自分自身の教育に対する理念や方法論について常に自問し、その答えを明確にしておかなければならないと言えます。その意味では、私自身が情報処理、物理、人文系科目と複数の分野に跨って教育を任されており、本ワークショップではその意義について問い直すことができる良い機会でありました。

府立高専に到着して渡されたスケジュール表を見ると、連日 24 時間がめ切になっており、内心驚きましたが、実際の作業時間は確かにその見積もり通りの時間が必要であり、むしろ普段とは異なる環境でじっくりと文書作成ができたことが大変に良かったと思っています。但し、その労力を考えると、同僚にそのまま勧めることも難しいと感じました。

メンターには、経験豊富な校長先生があたって下さったことも、スムーズに作業へ入れた要因の 1 つです。アドヴァイス時のつかず離れずの絶妙の間合いについては、大変に勉強になりました。

以上、感想に過ぎませんが、今年度も授業とその成果の振り返りを行うため、9 月初旬に TP の更新を行う予定です。今後、TP が大学教育現場にも浸透していくことを祈っております。

4. メンターを体験して

河野学 新任としての私は、1 年間の教育をまとめ、次年度の教育改善に生かすため、2009 年 1 月にメンティーとして TP を書く機会を得た。そのとき、アドバイスを頂いたメンターの A 先生の適切なご指導により、私の TP をまとめることができた。メンターは、TP 作成のアドバイザーとして重要な役割である。私は、今後の TP 活動に積極的にかかわっていききたいと思い、次の TPWS にメンターとして参加した。

メンターは、メンティーが今まで行ってきた教育の理念・実践を引き出すことが重要であるが、私は、メンターを初めて務めることもあり、他の先生のTPのアドバイスができるかの自信はなかった。ここで、私が最も苦勞したことは、メンティーが副校長のB先生であったことである。教育経験の浅いほぼ新任の私が、教育経験の豊富な、さらに重要な学校運営に関わる先生の教育の理念を引き出すことができるのか、非常に悩んだ。メンタリングをするときに、特に教育の理念の引き出しに苦勞した。TPの教育の理念は、自分独自のものがあると思われたが、B先生は、学校の理念が私の教育の理念という考えであり、学校運営に携わる方のTPの教育の理念は、違うことに感心させられた。その他、スーパーバイザーにも的確なアドバイスを受けて、何とかメンターを務めることができた。

また、私がメンターとして、興味を持ったことは、①受け持ったメンティーのTPが完成するころには、その先生の教育を理解し、また、メンタリングの中で私自身のTPの例を出すことで、教育の理念の意志の疎通が図れる可能性があるということ、②他の先生の教育の実践の中で、私自身の教育改善の参考になることがある。同僚の先生が今まで、どのようなことを考えて、教育を行ってきたか、どのような方法をとって教育を行っているかを知ることができる。今までほとんどつながりのなかった先生と少しだけ近づくことができたと感じることができた。このことから、TPWSは、学内の教員間連携を図ることができることを感じた。

最後に、メンターとメンティーは、直接かかわる人(研究分野、コース等)同士にしないことや、最後の概要発表会を行うこと、1日目と2日目に懇親会を開催することなど府大高専のTPWSの方法が非常にうまく働いていると思われる。このTPWSの活動を通じて、府大高専の先生方が一体となって、教育の改善に取り組めるようになることを期待し、また、他の学校もTPWSを開催してみてもうでしょうか？

金田忠裕 2009年にTPを2010年にAPを作成してから、5回目のワークショップ参加となった。メンターとしても4回目になるが、他高専を含めて高専教員相手ではかメンターを経験しておらず、高専は組織や考え方が似ているので、個人メンタリングも比較的問題なくスムーズに実施していたことを記憶している。

しかし今回は経験豊富な大学教授のメンターをすることになり、最初は少し不安があった。私自身は組織的なことを含めてメンティーの方の背景を感じ取ることが必要と考えており、最初の個人メンタリングでこれまでより時間をかけて色々な話を聞いている。その中でも教養

教育について、次世代の教員に伝えたいことを熱く語っておられたことを記憶している。現在企業においても技能伝承が重要であるように大学教育においても教育手法の伝承が重要であることを認識させていただいた。

個人メンタリングのなかで感じたことは、

- ①分野が異なっても共通する教育手法があるのではない
 - ②ベテラン教員は若手教員に伝えたいことがある
 - ③若手教員は自分の教育方法に不安を感じている
- である。これらの課題は、TP作成ワークショップを広めることで解決できるのではないかと考える。ベテラン教員は自分の教育手法をTPという形でまとめ、それを次世代の若手教員に伝えることが可能となる。

今後は大学でもWSを開催する予定らしく、これらの課題を解決する一つのきっかけになれば幸いである。

5. 事後アンケートの結果

ワークショップ終了後、メンティー10名に記名式のアンケートを実施した。10名全員から回答が得られた。表3にアンケート結果の一部を示す。

表3 事後アンケート結果 (一部抜粋)

5. ワークショップのスタッフについて
(1) メンターからの助言は役に立った (そう思う 9名, どちらかといえばそう思う 1名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)
6. ワークショップの成果について
(3) ティーチング・ポートフォリオは自身の教育改善につながる (そう思う 7名, どちらかといえばそう思う 3名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)
(5) ティーチング・ポートフォリオを作成してみた感想をお聞かせ下さい。
○普段から自分が「教育の理念」や「教育戦略」を考えていることを自覚して、教員としての資質をある程度クリアしていることが分かって意外に感じた。
○たまには良いと思う。
○自身の教育理念を確認できたことは、今後の教員人生にプラスとなる。他の先生方の教育に対する真摯な姿勢に触れることができた貴重な3日間であった。
○理念の構造化は大変役に立ちました。ただ、さらに深く考える必要があるのではないかと考えています。
○エビロークに書いたように、ティーチング・ポートフォリオを書くに際して改めて考えるのではなく、日ごろから漠然とでもよいから「教育とは自分にとって何か?」、「学生をどのように指導すればよいのか?」を考えることが重要である。しかし、日常の業務でそのような時間が取れない教員はティーチング・ポートフォリオを書くことで「教育とは自分にとって何か?」、「学生をどのように指導すればよいのか?」などを見つめなおすのも1つの方法だと思う。
○3日間集中してTPを作成することで、自分の教育を振り返り、点検できたことを充実感と併せてうれしく感じています。それも自分の考えだけで作ったのではなく、メンターの存在、他の参加者の存在の下に作成したことが、有意義であったと思います。
31年目の大学教員生活に入りましたが、担当授業科目も変わり、学生の質も変わる中で、いろいろな試みを企ててきました。失敗したり、ある程度うまくいったりということを繰り返しながら、最近の授業スタイルになっています。そんな過去の思い出(?)が、その時の学生たちといっしょに、今回いろいろと浮かび上がってきました。これも、うれしか

ったことの一つです。

○文章作成に時間がかかる方で, 3 日間で出来るか不安でいっぱいでしたが, なんとか完成してほっとしています。

内容については, メンターの方の導きが重要だと感じました。一人で書いたものより断然よくなるだろうと思いました。

○自省の機会としては最高でした。

ただ, 当初は書式や内容が自由であるため, 何を書けばよいのか雲をつかむような感じでした。

悩んでいるうちに, 「あまり体裁にとらわれずに, 自分が最も力を入れていること書けばいいや」という割り切った気持ちが醸成されたら, 半日程度で基本文章を書き上げてしまいました。

この悩んでいる時間が長くて辛い……

今後はこの経験をどのように生かしていくのかに挑戦したい。

○私の今回の TP は私の取組の中の一部を取り上げて紹介する形になった。それを意図して書いたのであるから当然であるが, メンターさんからはもっと背景(高校での経験)を書かないと読者には分からないと指導された。それはその通りであると思うので, ある程度分かるように書いたつもりであるが, ページ数は制限にかなり近ついた。このあと TP を更新するとなると, 違う取組なども書く必要が出てくると思われるが, その場合も経験から出る部分は記載する必要があるだろうと思う。そうすると, 各回の TP はシリーズもののような形になるのだろうか? 改訂への見通しがよく分からない部分です。

○自分の教育理念を建学の精神や校訓との関係で説明すること, エビデンスを確保しようと工夫すること, 自分の行っていることをメンターに理解できる言葉で説明しメンターからコメントをいただくこと, これらすべて大変有意義でした。自分の行っている教育や諸活動を見直す上で大変貴重な作業と考えます。ただ, エビデンスを確保することで自己顕示に終わってしまわないか, という点は注意すべき点として頭に残りました。

7. ワークショップ全体について

(1) ワークショップは全体的に満足できるものだった

(そう思う 8 名, どちらかといえばそう思う 2 名, どちらかといえばそう思わない 0 名, そう思わない 0 名)

(2) ティーチング・ポートフォリオの作成を同僚にもすすめたい

(そう思う 6 名, どちらかといえばそう思う 3 名, どちらかといえばそう思わない 1 名, そう思わない 0 名)

(3) ワークショップに参加して良かったと思われる点を, 具体的にお書き下さい。

○全く何も分からず参加したが, メンターの適確なアドバイスでスムーズに事が運んだ。それ故, 達成感もあった。また, 高専と大学の事情の違いも肌で感じる事ができて見聞が広まった。

○前向きに考える人と同席できたこと

○メンターが客観的にアドバイスをして頂き, 詰めなければならぬ事柄が良く分かりました。参加者が一体感を持って作業をしていたことも良かったかと思えます。

○昔のことが思い出されて, 反省にはなった。資料を残して正解だった。他の学校の先生と話す機会があり, 面白かった。C 先生や D 先生, E 先生の考え方がわかって面白かった。F 先生が困っていたのが印象的だった。

○自分の教育スタイルを再確認できた。

・所属大学の教育の活性化に関して, もうひと頑張りしてみようという気持ちになった。

・新しい出会いがあった。

○3 日間缶詰で作業をするというのは, 新鮮な体験でした。また, 仕事のメールなども見ないようにできたので, 本当に集中できました。

○G 大学を退職した頃の教育に対する重い思いを思い出し, 修正することができた。

○これまで高専で取り組んできた教育について, まとまった振り返りができたことは有意義であったと思う。

○メンターさんからの数回の指導を受け, また同じ作業スペースで志を共に作業する皆さんとともに取り組む機会に恵まれなければ, この水準の TP の作成は困難だったと思います。そういう機会を与えて頂いた大阪府立高専の皆様には心より感謝申し上げます。今後も「同じ場所で TP を作った」という関係を皆様と維持していければと希望します。

本稿では, 2010 年 8 月 11~13 日に行われた第 3 回 TP 作成 WS に学外からメンティーとして参加した 5 名と, メンターとして参加した 2 名の感想を記した。この第 3 回以降, 他の大学・短大・高専から TP を執筆しに多くの教員が本校に訪れていただけるようになった。第 3, 4 回と広島大学からお 1 人ずつ参加していただいたが, その広島大学では本年 9 月 28~30 日に TP 作成 WS が開催され, その方々はメンターを務められる予定と聞いている。

一方, 高専は教育重視型の高等教育機関であり, 規模的に見ても教員数が 60~100 名と学科や専門が異なってもお互い顔見知りであり, TP が定着する素地が整っている。本校では 2011 年 8 月 10~12 日に, 第 5 回目となる TP 作成 WS を行い, TP 作成者が 36 名(46%)となった。阿南高専でも, 2011 年 9 月に第 5 回目の TP 作成 WS が開催される。釧路高専では 2011 年 3 月 24~26 日に第 1 回目の TP 作成 WS を開催した。東京都立産業技術高専では 2011 年 9 月 3~5 日, 鹿児島高専では 2011 年 9 月 17~19 日にそれぞれ第 1 回目の TP 作成 WS が開催される予定である。その他, 日程は未定であるが, 東京高専および沖縄高専でも TP 作成 WS の開催が検討されている。このままいけば, 本年度末には全国 57 高専のうち 12 高専(21%)で TP の執筆者が在籍することになる。

今後, 各大学・高専でさらに TP が広がることが予想される。TP は教員であれば, 誰でも執筆することが可能である。第 6 回の TP 作成 WS は 2011 年 12 月 26~28 日に開催予定である。この原稿がこれからティーチング・ポートフォリオを作成する諸氏の参考になれば幸いである。

謝辞

本ワークショップは, 文部科学省公募事業大学教育推進プログラムによる支援を受けて実施した。関係各位に対し, ここに謝意を表する。

参考文献

- [1] 北野, 中谷, 金田, 和田, 井上, 伊与田, 葭谷, 藤原: 日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して, 大阪府立工業高等専門学校 研究紀要 第 43 巻, pp. 63-70 (2009)。
- [2] 北野, 河野, 西岡, 君家, 土井, 早川, 東田, 中田, 中谷, 井上, 金田, 葭谷: 第 2 回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告, 大阪府立工業高等専門学校 研究紀要 第 44 巻, pp. 63-70 (2011)。
- [3] ピーター・セルディン著, 大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳: 大学教育を変える教育業績記録, 玉川大学出版部(2007)。

6. おわりに